

近所とのふれ合い

群馬県 高瀬小学校 4年 萩原 ころろ

わたしが受けた小さな親切は、わたしが小学3年生のときのことです。わたしが、いつも通りに学校から帰ってくると、げんかんのカギがしまっていました。その日、お母さんは妹の病院に行くので、すぐには帰ってこられないのに、朝、家のカギを持って出るのを忘れてしまったのです。わたしは家に入れず、お姉ちゃんが帰ってくるのを、家の前で待っていました。

でも、待っているとちゅうでトイレに行きたくなり、どうしようかと家の前でこまっていたとき、近所に住むおばさんが仕事からちょうど歩いて帰ってきて、家の前にいたわたしに気づき、

「どうしたの？」

と声をかけてくれました。わたしはおばさんに、

「トイレに行きたくなったんですけど、家のカギがなくて入れないので、近くの公園まで行こうとしたんです。」

と言うと、おばさんが、

「だったら、おばちゃんちのトイレをかしてあげるよ。」

と言ってくれました。だからわたしは、

「ありがとうございます。」

と言って、トイレをかしてもらいました。

わたしはトイレをかりたあとにもう一度、

「ありがとうございました。」

と言って帰りました。

ちょうど家に帰るとお母さんが帰ってきていて、おばさんにトイレをかしてもらったことをすぐに話しました。

お母さんは、急いでおばさんの家にお礼を言うために、おばあちゃんちの畑でたくさんとれたやさいやくだものも持って、わたしといっしょに行き、おばさんにもう一度お礼を言いました。

そのときも、おばさんはやさしく、

「外で一人で待ってたので、どうしたのかなあとと思って声をかけたんだよね。」

と言っていました。お母さんは、とてもおばさんに感謝していました。

近所に住むおばさんは、よく犬のさんぽをしています。私は犬が好きで、よくあいさつをかわしていたので、声をかけてくれたのかなあと思いました。

ふだんから、近所の人たちとあいさつや会話をすることは、とても大切なことだと思いました。だからわたしはこれからも、おばさんや近所の人たちにきちんとあいさつをし、こまっている人がいたら助けてあげたいです。そしてわたしも、おばさんのようなやさしい気持ちをもった大人になって、たくさんの人たちにやさしく声をかけたいと思います。